

令和7年度 校内研究 全体会資料

今年度の研究主題

支え合い、高め合い、一人一人が『要場所』をもてる学校づくり

～異学年交流を通して～

「『要場所』をもてる」

→必要とされる場、安心感のある場を自ら獲得し、実感できる。

「支え合う」

→相手意識 協力、思いやり、助け合い など

「高め合う」

→自己実現 あこがれ、リーダーシップ、目標、挑戦、責任感 など

1. 本日の目的

今年度の校内研究の取組を振り返り、成果と課題を整理するとともに、次年度に向けた方向性を共有する

2. 本日の流れ

1. 校長先生より 7分
2. 児童アンケートからのまとめ 5分
3. 教員アンケートからのまとめ 5分
4. 来年度の方向性 5分
5. 分科会協議 10分
6. 分科会共有 10分
7. 副校長先生より 5分

3. 「児童アンケート」と「分科会のまとめ」からの考察

事実

- ・児童アンケートが前後期で集計方法が異なったため、単純な比較による効果測定は困難であった。
- ・後期において肯定的回答の割合が前期より低い設問も複数見られた。

解釈

- ・数値には学年間・設問間でばらつきが見られ、本校の全体的な傾向として解釈することは適切ではないと判断した。

教師の見取り

- ・分科会での分析や日常の見取りからは、交流活動の中で、児童の望ましい姿が多く確認されている。
- ・「振り返り」の記述からも、多くの児童が意欲的に活動に取り組み、ねらいを達成していることがうかがえた。
- ・問題行動のある児童にとっても、交流の場が「要場所」となっていた事例が観察された。

成果の整理

- ・本年度の異学年交流は、少なくとも交流の場面においては、児童の行動レベルで良い変容が見られた。

アンケートと見取りのギャップの解釈

- ・具体的な行動と児童自身の自己認識が十分に結び付いていなかった可能性がある。

4. 「教員アンケート」から、意見の傾向

- ・ペア学年を決めて1年間継続的に交流したことは、効果的であったと考えることができる。
- ・時数の確保が課題である。また、活動内容については、今年度については教師主導になっているものも見られた。
- ・来年度以降も継続するのであれば、年間指導計画に位置付けるなどの工夫が必要である。
- ・特別活動の基本である学級会について、十分な時間をとることや研修を深めることが大切である。

5. 今年度の成果と課題

成果

- ・ペア学年を中心とした異学年交流は、児童が相手を意識し、支え合い、高め合う行動を生み出す場として機能していた。
- ・一部の児童にとって「要場所」としての役割を果たしていた。

課題

- ・「支え合い」「高め合う」という概念を児童自身の自己認識とどのように結びつけていくか？
- ・異学年交流の中で見られた良い姿は、どのように日常の学校生活全体へと広げていくか？
- ・児童も教員も無理なく、価値のある交流活動をするにはどうすればよいか？

6. 来年度の方向性

継続

- ・学年ペアを固定し、年間を通した継続的な異学年交流を実践する。

改善

- ・「支え合い」「高め合う」とはどのような姿か、具体的な行動例を教師間、教師・児童間で共有し、明確にする。
- ・交流の中で見られた良い姿を、日常へ広げるため、活動の「事前事後の指導」（動機付け、価値づけ、振り返り）を充実させる。

新たな一手

- ・教科・領域で異学年交流を実践する。

7. 分科会協議・共有

テーマ

- ・来年度の方向性（研究の内容、研究の進め方）について

来年度は、交流を“活動”で終わらせない。

その質を高め、日常生活へと広げる挑戦の一年とする。